

氏名	中村 馨章
ヨミガナ	ナカムラ ヨシアキ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第467号
学位授与年月日	平成27年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 境壁を越える対話の可能性 -疎外の痛みとともに- 〈作品〉 カウザルギー -錬金術のプロセスとしての回復- 言葉の障壁、言語への再考 永遠に音を響かせる無音世界 -意識と無意識の境界-

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	齋藤 典彦
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	佐藤 道信
（作品第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	植田 一穂
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	関 出

（論文内容の要旨）

私には先天性の聴覚の障害¹がある。そのため、わずかな音と、目の前の人の口元や身振りを見て、言葉について考えるのが日常である。健聴者の世界で、大人になるまで手話を使うことなく育ったため、他者と交流することや情報を取得することが困難であった。その上、言葉を理解し、話せるようになるのに時間がかかったため、他者と十分にコミュニケーションをすることが、人生の夢であり、希望であった。したがって、人々の間を隔てている“境壁”²を乗り越えた対話の可能性を模索することが、主要な関心事である。また、同時に「生と死」という不可解な命題への問いかけは、個人的体験の発露をこえた、巨大な水脈へ導くものであると考えてきた。この生死の世界を掘り下げることが、他者との壁を乗り越える手段であり、無音の世界を探ることに繋がっていった。

私にとって、人との対話の困難さがもたらす疎外の痛みは、外の世界に向けられるばかりでなく、内の世界にもその痕跡を残してきた。静寂の日々、無意識下に潜在していった内との対話は、神話上の存在や霧のような形となって紡ぎ出されていった。神話の世界を用いて制作していたことは、幼いころから身近な場所にあった聖書と無縁ではない。私が、疎外の痛みを絵画に表現するようになったのは、光を表現するために闇を描く行為と同様に、それが生を表現するために死を描くことでもあったからだ。では、相反する世界を融合し、共存させることは可能なのか。

人間の営みには、様々な物ごとに統一性を持たせつつも、差異から多様性を確保しようとする生理的な本能が備わっている。私にとって、この衝突から生じる疎外の痛みが、死のように感じられてきた。だが、他者との境界線は、どのような方法をもってしても越え難いものである。この境界を越え、大きな視点で自らのアイデンティティを律するために、私は多様な民族の国家であり、かつADA法³を持つアメリカに留学した。そして異国から見た視点で、日本の根幹を理解しつつ、自らの立ち位置を考えたことが、本論文にも大きく

¹近年、障がい、障害という新しい呼び名があるが、本論文では以前から使われている障害を用いる。「障害者」とは、社会において障害となる明らかな特徴を持ち、生活に著しい支障をきたしている人を指している。

²「境界」に「壁」があるようにも感じたため、“境壁”として捉えた執筆者の造語である。

³アメリカには、障害者に対する差別をなくすための法律があり、1990年に世界に先駆けてADA法として成立した。このADA法は、チャリティーの対象から、市民としての人権を保証するという障害者の独立宣言であり、世界に衝撃を与えた。

影響している。

第1章では、「聴覚と視覚の情報処理」について考察した。私は、聴覚が空間と色彩認識に影響を与えているのではないかと考えた。外からの情報は、多数の感覚野が脳の中で統合されてから意味と内容が理解される。特に視覚と聴覚は密接に影響し合っており、通常の発達においては、総合された感覚機能があって初めて発話の発達が可能になり、高度で抽象的な種類の認知が形成される⁴。この言語と思考の発達は、安定した聴覚と視覚の結びつきに依存している⁵。一方で、聴覚障害者の脳機能は、科学的に健聴者との差が見出されてきており、脳の機能配置が異なる⁶。私が、人工内耳で幾らかの聴覚を取り戻したことで、聴覚と視覚の統合によって知ることができた空間や色彩認識の変化について、認知科学の視点、そして作家の言説を通して分析した。また、聴覚障害による二次的な障害を招いたと思われる言語コンプレックスについて取り上げた。

第2章では、「疎外の痛み」について述べた。心の痛みは、永久的に私的な知覚体験であるため、共感することが容易ではない。しかし、最先端の医学では、心の痛みと外傷の痛みを感じる場所が、同じであることが分かってきている。では、何故この世に障害や民族の差別が遍在するのか、こうした人々の間にある垣根を乗り越えることは可能なのか。また、アメリカでは、障害者達がどのようにして各々の痛みを越えて共生しているのかを探った。

第3章では、「無意識世界」について分析した。全ての人間にある共通の記憶は、無意識集合体に還元され、それが自身の制作に関連していると考えるためである。手掛かりとして、幼い時に接した神話や、箱庭療法について言及し、神話、心理学を通して、人間とは何かを考えた。

第4章では、「博士課程で制作した作品」について解説した。内側の世界と外側の世界を結びつける表現を目指しつつ、疎外の痛みについての問題提起をした。また、他者との壁を越えるための新しい方法の思索を、今後の課題とした。

⁴ リチャード・E・サイトウィック&デイヴィッド・M・イーグルマン『脳のなかの万華鏡・・・「共感覚」のめくるめく世界』山下篤子訳、河出書房新社、2010年、257頁

⁵ Dehay C, Kennedy H, Bullier J: Characterization of transient cortical projections from auditory, somatosensory, and motor cortices to visual areas 17, 18, and 19 in the kitten. J Comp. Neurol. 272: 68-89, 1988.

⁶ Lomber SG, Meredith MA, Kral A: Cross-modal plasticity in specific auditory cortices underlies visual compensations in the deaf. Nat Neurosci. 13: 1421-1427, 2010.

(論文審査結果の要旨)

本論文は、先天性の聴覚障害をもつ筆者が、それによって他者との間、自己の内に築いてきた「境壁」を超える試みについて論述したものである(「境壁」は筆者の造語)。博士課程在学中に、筆者は人工内耳の装着手術を受けて一定の聴力を回復し、聴覚と視覚の関係の変化を経験している。そのため、視覚認識と聴覚認識の関係論としても、初めて知ることの多い興味深い論考となっている。

第1章では、まず聴覚認識のしくみについて、現在の科学研究から確認する。外部からの情報は、多数の感覚野が脳で総合されて初めて意味と内容が理解されること。聴覚は発話だけでなく、空間認識や色彩認識、時間感覚にも関係していること。その上で、失聴時期の自作品や、同様の経験をしているゴヤの失聴後の作品、難聴だった富岡鉄斎の作品などを分析する。第2章では、外傷の痛みと心の痛みを認識する脳の部位が同じであることが明らかになってきた近年の研究成果を受けて、障害によって生じた自らの心の痛み、さらに社会的あるいは民族間の差別や疎外へと考察を拡大。アメリカ留学でADA法と障害者の自立を知り、異質であることの相互の承認と共生に、「境壁を超える対話の可能性」を見出す。第3章では、そうした痛みや境壁を超える共生への可能性の具体例として、人間の記憶が深層部で共通する集合的無意識(ユング)に注目。神話における救済や、また個別事例として彼も幼少時に受けた無意識領域の箱庭療法について述べる。そして第4章で、今回の提出作品について解説している。

筆者の聴覚は、初めから聴こえなかったのではなく、難聴が進行して失聴状態となり、人工内耳である程度聴力が回復したという経緯らしい。それによる精神的苦痛は、他者が想像する以上に大きかったはずだが、同時に一方で人間の知覚システムと自身での変化、表現との関係を冷静に分析している点は注目される。失聴時の空間認識が、立体を把握しつつも2次元の映画スクリーンのように見えたこと。失聴時は無音ではなく轟音のようなノイズが鳴り、それを感覚のままに描いた作品では、形態が失われた抽象世界になったことなど、表現者と研究者の視点がバランスよく同居し、相互参照的に自らを分析している。また作品では青と赤の色彩を多用しているが、それは直接的には癒しや痛み、大きくは無意識世界に淵源する神話のイメージにつながっているという。同時に筆者の神話的イメージは、幼少時から身近にあった聖書とも無縁ではないらしく、痛みを描くことは、光と闇、生と死を描くことでもあったという。

そうした筆者の多くの思索が凝縮された本論文は、たんなる表現論をこえた思索の深さと強度を備えている。論文発表会では「感動した」という聴衆の声もあった。優れた学位論文として、審査会の高い評価と承認を得た。

(作品審査結果の要旨)

申請者は先天的に聴覚の障害を持つ。次第に難聴が進行しやがて失聴状態に陥ってしまう、その恐怖からくる精神的苦痛は我々の想像を絶する。また、人との対話の困難さがもたらす疎外感からくる痛みも、トラウマとなり深く彼を傷つけていった。その痛みは制作の根拠になると同時に、自身の内部にもいつしか壁を築き、他者や社会との間の壁を乗り越えることをさらに難しくしていった。いつしか、他者とのコミュニケーションを構築することが申請者の人生の夢となり、希望となっていく。そして、博士課程在学中のアメリカへの留学と、人工内耳の装着手術は申請者の意識に大きな変化をもたらす。申請者は2013年から1年間、障害者の人権の保護という点で先駆的と言えるアメリカへ留学する。お互いの違いを認め合い、障害をもつ人間として自らの生を肯定するというアメリカの障害者たちの姿勢に大いに共感し、聴覚障害を恥じることなく自らを示せば良いという事を学び「境壁を超える対話の可能性」を見いだしていく。そして人工内耳装着手術を受け、ある程度の聴力の回復を得た彼は、空間認識の変化を経験していく。本論文は、他者との間、自己の内に築いてきた「境壁」を超える試みについて考察したものであり、作品はその思索の実践を試みたものである。

提出作品「カウザルギー ― 錬金術のプロセスとしての回復 ―」は3メートル超の横長の画面に、音や言葉の化身である蝶が、模様で遮られた障壁を破壊し飛翔している様を描く。あらゆる境界を乗り越えていく

ように、という申請者の強い願いを具現化したものである。薄い絵具を何層にも塗り重ねた重厚な画面は、見るものを圧倒する迫力と説得力を持つ。申請者は、今後も聴覚に障害があるという事実を受け容れ、視野を広げながら疎外の痛みとは何かを見つめて制作していくという。それは、言葉でいうほど簡単なことではあるまい。しかし、表現の世界においては「人と違っている」という事は大きな武器になるはずである。申請者独自の表現世界の構築を期待したい。

審査会においては、審査員全員が申請者の一連の作品を高く評価し、学位に相応しい作品であると判断し合格とした。

(総合審査結果の要旨)

申請者は、近年、人工内耳の装着手術を受けて一定の聴力を回復したが、先天性の聴覚障害をもつ。そのため、他者や社会と自身との間にあるさまざまな壁の存在に悩み続けてきた。それは、制作の根拠となると同時に自身の内部にもいつしか壁を築き、他者や社会との間の壁を乗り越えることをさらに難しくもしてきた。申請者の論文・作品における思索と実践とは、まさに自身が「境壁」と名付けた内部外部のさまざまな壁をいかに乗り越えることができるか、その可能性を探ることでもあった。

論文では、まず申請者の障害についての記述から、聴覚が視覚など他の感覚器官にあたえる影響や、言語・空間認識における脳機能の健常者との差異について、自身の手術前後の経験と最新の知見をとりこみ述べる。そして、障害によって生じた自らの心の痛み、さらには社会的あるいは民族間の差別や疎外へと考察を拡大し、アメリカ留学でADA法と障害者の自立を実見したことから、異質であることの相互の承認と共生に「境壁を超える対話の可能性」を見出す。また、集合的無意識や神話における救済にその可能性を見るとともに、制作の背景としてそれらがどのような役割をはたしているのかについても述べていく。以上、人間の知覚システムと自身での変化、表現との関係を冷静に分析し、申請者の多くの思索が凝縮された論文であり高く評価できる。

作品においても、アメリカ留学の前後の経験―聴力の回復による空間認識の変化、自身の障害を相対化し受け入れる覚悟―により、大きな展開をみせる。アメリカでの筆談メモを貼りこみ上から染料で着色した「言葉の障壁、言語への再考」では、薄い染料の層が、聞こえるが聞こえない、という境壁をあらわし印象的である。また、失聴時の作品を細かく裁断し、あらたな聴覚を得た世界として組み合わせ再生する作品「永遠に音を響かせる無音世界―意識と無意識の境界―」では、無音世界と人工内耳による聴力を併せ持つ矛盾を、組み合わせられた過去とそれを包む空白部分で表そうとし興味深い。どちらも申請者の思索と思考が直接結晶化した作品であり、提出作品とは別の表現の可能性を感じさせる。

提出作品の題名の“カウザルギー”とは、もともとは神経痛の痛みのことであるが、申請者は、心因性をともしう灼熱の痛みとしてとらえる。そして、蝶と古代模様、水と火、自身の聴力の回復と無音世界などを生と死の象徴として重ねあわせ、それらが統一された調和の世界、対話の結晶として描き出そうとしている。申請者の真摯な思索と実践の成果として、また今後に向けた第一歩として高く評価できる。

以上のように、論文、作品ともに申請者の多方面にわたる思索と実践の結果として充実したものであると審査員全員が高く評価し、合格と判定した。